特集その2

祝米寿 正田陽一 先生 が語る
（エンリッチメント大賞審査員/東京大学名誉教授）

エンリッチメントと動物園と市民

2002年のエンリッチメント大賞の開始当時からずっと審査員を務めてくださっている正田陽一先生が、今年３月に米寿を迎えられました。おめでとうございます。年を重ねられても知的好奇心が衰えることなく、多方面で精力的に活動されていらっしゃるお姿は、私達の憧れです。

正田先生は、東京動物園ボランティアーズ（ＴＺＶ）の第１期生かつ前会長として長く動物園の市民活動にも関わっていらっしゃいました。今回は、そんな正田先生が考えるエンリッチメントと動物園と市民の、これまでとこれからについてお話を伺いました。

先生へのお祝いメッセージも盛り込んでの誌面、お楽しみください。

1.「エンリッチメント」との出会い

私が「エンリッチメント」という言葉と出会ったのは1990年代の後半で、犬山にある京都大学霊長類研究所の松沢哲郎先生の研究室を訪問した時です。窓からチンパンジーの運動場が見えたのですが、そこに大きなタワーが建てられていて、地面には樹木が植えられていました。松沢先生は、チンパンジーが樹木をダメにしてしまわないように、野生のチンパンジーが樹木に求める機能を細分化し、タワーや多様な食べ物などの代替手段を樹木と同時に供給することで、チンパンジーと樹木の共存させる取り組みを行っていらっしゃいました。緑のある環境にいることがチンパンジーの生活を豊かにし、やすらぎを与えることを確信していらっしゃったのです。

霊長類研究所のチンパンジーの運動場
写真提供：京都大学霊長類研究所

一方、アメリカで流行っていた動物行動学的展示というのも聞きました。これは、動物が野生で見せる行動を再現させるために、機械を使って餌を動かしたりするという話です。当時、日本では生態的展示を取り入れようという声が大きかったのですが、私はやはり、動物が行動する姿こそが魅力的であり、それを観察することが教育上も大切だと考えていて、会議でそういう話をしたこともありました。

2.「エンリッチメント」と「ハンズオン」

現代の動物園を考えるにあたって、私の印象に残っている言葉が３つあります。「ハンズオン」、「ランドスケープ・イマージョン」、そして「エンリッチメント」です。私は、この中で一番大切なのが「エンリッチメント」だと考えています。

上野動物園の園長を長く勤められた古賀忠道さんは、「動物園はアニマルウェルフェア・ファースト（動物福祉最優先）が大切」だと仰っていました。それを聞いたときは、綺麗ごとすぎるのではないかと思ったものです。動物園というのは、どうしたって動物を野生から捕まえて来て、束縛している存在です。しかし、だからこそ、その原罪を認めた上で、負担を強いられている動物のことをまず考えるというのは、とても大切なことだと思うのです。

次に大切だと思うのが「ハンズオン」です。私は、動物園が果たすべき一番大きな役割は、教育だと考えています。そして、教育の効果をいかに上げるかを考えたとき、来園者がただ受動的に展示を眺めるのではなく、自ら積極的に行動を起こすことで学ぶことは、とても大切だと考えています。

「エンリッチメント」と「ハンズオン」、つまり動物福祉と教育効果をきちんと考えていくことが、これからの動物園にとって大切なことだと思います。

ブロンクス動物園「マダガスカル」展示のハンズオン
卵に触れると、絶滅したエピオルニスの骨格が浮かび上がる
写真提供：横山卓志（市民ZOOサポーター）

3. 市民参加型のエンリッチメント大賞

エンリッチメントは、キーパー（飼育員）が来園者に見えないところも含めて取り組んでいる活動ですが、エンリッチメント大賞は、推薦から取材、発表といった一連の作業を市民活動としてオープンな形でやっています。ここで重要なのは、動物園側が自薦・他薦を含めて積極的にエンリッチメントの取り組みを情報発信していることです。推薦があった取り組みの中で、一次審査を通過した案件については、市民スタッフが現地取材などの情報収集をしていますが、その時も動物園がしっかりと情報提供してくれています。そうして確認できた情報を市民スタッフと私たち審査員が共有するからこそ、審査が成り立っているわけです。このようにして動物園のエンリッチメントの取り組みを顕彰できるのは素晴らしいことで、理想的な形だと考えております。

長崎バイオパーク　カピバラ展示場
（エンリッチメント大賞2009大賞受賞）

長崎バイオパーク副園長　伊藤雅男

正田先生へ米寿のお祝いを申し上げます。先生との出会いは東京動物園ボランティアーズで私が4期生として入会したことでした。当時の私は高校１年生でした。第一印象は「やさしい大きい人」だったと思います。私が「ウシ科の動物が大好き！」と話したところ、大変驚かれ喜んでくださいました。でもその後、私は西山登志雄さんの洗脳でカバ好きに変ってしまいましたが。

高校卒業後に財団法人進化生物学研究所にお世話になることを報告したところ、とても喜んで頂きました。当時所長だった近藤典生博士とも先生はお付き合いがあったことも後日知ることになります。進化研から現在勤務の長崎バイオパークに就職した後に先生が長崎に来られたことがありました。まだ20代の私に先生を接待するほどの財力はなく、選んだのが長崎県内の４つの動物園水族館めぐりでした。そして、2009年にカピバラでエンリッチメント大賞を頂けたのも先生からの後押し（組織票？）があったからだと想像し、感謝しています。

今後もお体に気をつけて頂きながら、動物園水族館のためにご尽力頂き、これからもご指導をお願い致します。

＊西山登志雄：後の東武動物公園園長。カバ園長と親しまれた。

埼玉県こども動物自然公園のペンギンヒルズ

正田先生の略歴

1927年3月31日　東京に生まれる。
1950年　東京大学農学部畜産学科卒業。同大助手、助教授を経て、1979年教授。1987年から1992年まで茨城大学教授（農学部）。現在、東京大学名誉教授。牛の博物館名誉館長、動物愛護社会化推進協会理事長、全日本家禽協会理事、東京動物園ボランティアーズ顧問など

主な著書、共著
『家畜という名の動物たち』1983/11
『家畜のはなし（人間の知恵25）』1986/4
『人間がつくった動物たち―家畜としての進化』1987/6
『ものをつくる動物たち―人間と動物の将来 』1988/10
『品種改良の世界史　家畜編』2010/10
『世界家畜品種事典』（監修）2006/1　など

4.エンリッチメント大賞を振り返って

これまで、長くエンリッチメント大賞の審査にあたってきて、たくさんの素晴らしい取り組みに出会いました。記憶に残っているものはたくさんあるのですが、あえてその中から申し上げるのであれば、埼玉県こども動物自然公園の一連の取り組みが印象的でした。2006年に来園者参加の「どうぶつしあわせ大作戦」で大賞を受賞したのを皮切りに、2008年には動物園全体として受賞、そして2011年にはペンギンヒルズ、2012年にはシカとカモシカの谷と、実にさまざまな取り組みをされています。この動物園は、上野動物園で長く子供動物園に関わられた遠藤悟朗さんが初代園長だった施設で、先代の日橋一昭園長も尽力されました。遠藤悟朗さんは、日本動物園水族館教育研究会（Ｚｏｏ教研）を立ち上げた方でもあり、その功績がこのような形で受け継がれているのは大変うれしいことです。

5.動物園と市民と教育

動物園と市民の関係は本当に少しずつではありますが、いい方向に行っているのは間違いないと思います。昭和49年（1974年）にＴＺＶができたときは、動物園には教育や展示を考える担当の人がいませんでした。ＴＺＶと同じ年に、西山登志雄さんが普及指導係長になりましたが、これも人員が増えたわけではなく、ステージでショーに出る動物の担当からの配置替えでした。動物園と市民の関係は、まだまだ課題はたくさんありますけれど、当時のことを思えばずいぶん良くなっていると思います。

これから先、動物園が教育効果をもっと上げていくためには、動物園や私たち市民ボランティアだけでなく、子供を連れてくる親の協力も欠かせません。以前、不忍池のアメン

Wildlife Conservation Society 展示デザイン部門　Studio Manager　本田公夫

東京動物園協会の動物愛好会（今の東京動物園友の会）1973年1月の例会で正田先生の「ウシのおはなし」を拝聴していますが、当時私は中学生、お話は家畜寄りの内容で、先生の本当の「正体」をはじめて知ったのは大学入学と共に東京動物園ボランティアーズの３期生に応募してからのことでした。

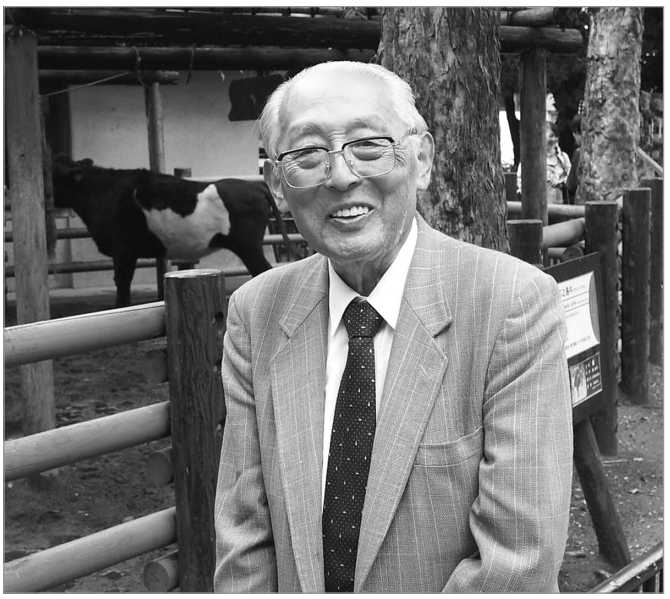
それ以来アメリカに転勤になるまで、動物園や動物学、畜産学はもとより絵画、文芸、日常のたしなみ、そしてもちろんお酒も、人としてのほとんどあらゆることを正田先生のお近くにいることで学んだと言っても過言ではありません。TZVで知り合った家内も、わたしとの結婚など考えてもいないころ先生の研究室で事務のアルバイトを仰せつかったりしており、わたしたちの人生は先生の存在を抜きに語れません。

正田先生のお人柄と動物園への思いが人の輪に輪を重ねてきたことはみなさんがご存知の通りです。一時はご健康を危惧した時期もありましたが、不死鳥のように蘇られ、米寿を越えてなお人の輪を広げ続けていらっしゃることは驚嘆と共に慶賀に堪えません。正田先生にお近づきになれた幸運に感謝し、不肖の押しかけ弟子の名に恥じぬよう、動物園のために努力を続けてまいります。正田先生、一層のご健康とご長寿を心よりお祈り申し上げます。

ボに夢中になっている子供を、母親が「パンダがしまわれちゃうよ」と言って強引に引っ張って行ってしまったことがあり、とても残念に思いました。せっかく子供がアメンボに夢中になっているのだから、なぜ浮いてスイスイ動けるのかなど、一緒に考えたり話をできることがあったはずです。一方で、素晴らしい親御さんもいらっしゃいます。私が冬の水鳥観察をしている時、子供にキンクロハジロの潜水時間を尋ねられたことがあります。私は困ってしまったのですが、その子のお母さんは「すぐに人に聞くのではなく、自分で測ってごらん」と助け船を出してくれたのです。そして、私はその子と一緒に20回ほども潜水した個体を追跡して、潜水時間を図りました。その結果、ほぼ25秒だと分かったのですが、その間、お母さんはずっと寒空の下で待っていてくれたのです。

残念ながら、日本では動物園はまだまだ子供のためという意識が強く、大人になっても動物園に夢中になる人は変わり者だと見られてしまいます。しかし、欧米の動物園には、日本よりも大人が多く来ています。これからは、日本の動物園も子供のためだけでない取り組みをしていかなければいけません。その意味で、新しくできた京都市動物園の図書室は素晴らしいものです。動物園には、動物を見せるだけでなく、図書や映像や標本などいろいろな形で情報発信をしてもらって、子供だけでなく、多くの大人が学べる場になってほしいと願っております。

京都市動物園の図書室



狭山市智光山公園こども動物園園長　日橋一昭

先生、米寿おめでとうございます。

先生と初めてお会いしたのは今から42年前東京動物園ボランティアーズ結成の準備会の時でしたよね。準備委員に選ばれてすぐ、おでん屋に誘っていただきました。私はその頃、スカンピンの20歳の学生でした。私が46歳になった時、ふと気が付きました。「そうだ、あの時の先生の年だ。俺、今まで何してきたの。」品格はともかく（誰も敵（かな）うわけはない。）自分の成長の無さに愕然とした記憶があります。

2011年の「ペンギンヒルズ」2012年の「シカとカモシカの谷」と連続して埼玉県こども動物自然公園がエンリッチメント大賞を受賞した時、本来なら飼育担当者に登壇してもらえばよいのに先生が表彰者という情報を聞きつけ、「俺が先生からもらう。」と園長がしゃしゃり出る醜態を見せました。現在勤務している狭山市立智光山公園こども動物園でも、いつか受賞して先生から賞状をもらうという野心をもって仕事をしています。しばらくかかると思いますので、先生いつまでもお元気で。

「米寿」のお祝いは、数え年ですることが多く、昨年の正田先生のお誕生日には、たくさんのお花や贈り物が届いて、ご自宅は大変なことになっていたそうです。過去から現在に到るまで、国内外の動物、動物園に関する豊富な知識、そして穏やかな笑顔と誰にでも理解できる平易な話し方。どこにいっても、先生の周りには取り巻きがいっぱいです。そんな先生をどんな日にも支えてこられたのは、奥さまの裕子さん。裕子さんの一番の心配ごとは、これまでもこれからも先生の健康。皆さんも、それは同じだと思います。先生を誘われる時には、くれぐれも適量でお楽しみいただきますよう、お願い申し上げます。